

①豊葦原中つ国王朝期～伊都国王朝期の王墓

【須玖岡本遺跡の巨石下甕棺墓】（福岡県春日市）、明治三二二年に須玖岡本の巨大な支石墓直下から発見された甕棺。そこから、前漢期の草葉文鏡（前二世紀後半）・星雲文鏡鏡（前一世紀前半）など三十数面、細形銅矛四・中細銅矛一、中細銅戈一、細形・中細銅劍二以上、ガラス璧・ガラス勾玉・管玉などが出土した。出土した草葉文鏡は径二十三センチ余もあり、中国出土の平均径・十三センチに比べてはるかに大きい。

鏡の年代と甕棺の様式から、前一世紀後半の墓とされる。近辺からも、銅劍・銅矛・銅戈・鉄刀を伴う甕棺多数、銅矛・小銅鐸・小型鏡の鋳型、鉄器の工房跡（紀元前後）などが見つかった。

【三雲南小路遺跡】（福岡県糸島市）、徳川期の文政五年に見つかった三雲南小路の甕棺一号棺。そこからも、内行花文鏡など前漢鏡三五・細形有柄銅劍一・銅矛二・銅戈一・金銅四葉座飾金具八・ガラス製璧八、朱入りの壺などが出土。これと同形の有柄銅劍が吉野ヶ里遺跡からも出土したことで、吉野ヶ里にあった厳一門が福岡平野に乗り出してきたとする本書の考えは、的を射ていることになる。

昭和の時代に、一号棺の存在は再確認された。その際、二つ目の甕棺も発見された。二つの甕棺とも、三一×二一センチの方形周溝墓に納まっていた。

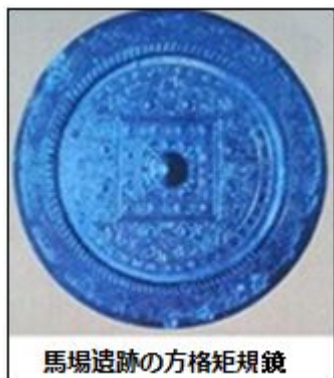
この中のガラス製璧は漢の皇帝から諸王や諸侯に下賜されたもの、四葉座飾金具も王侯・功臣・属国王の死去に際して皇帝から贈られる木棺の装飾金具だった。鏡の年代・甕棺の様式・木棺の装飾具から推して、紀元前後の埋葬とされる。

②倭奴国王朝期の王墓

【井原鍔溝遺跡】（糸島市）、天明年間に見つかる井原鍔溝遺跡は倭奴国王の墓らしい。三雲遺跡から南へ一〇〇ほど離れた水田の中にあつたという墓だ。その墓から、後漢の方格規矩鏡二一面以上、鍔の札・鉄刀・鉄戈らしきもの、巴形銅器三が出た。この方格規矩鏡の様式は後漢初期のもので、金印を授かった頃に近い。

【平原墳丘墓】（糸島市）、巨大な方形周溝墓の木棺外部から鉄製の素環頭太刀一本とともに、破断された四二面分の鏡（方格規矩鏡三五、四六・五の日本製内行花文鏡五）などが出た。そこには、三角縁神獸鏡は一枚も存在しない。

この墓は厳之国の尊ぶ方形墓であるものの、副葬品として天之国祭器の鉄剣・数多の方格規矩鏡、厳之国の称える内行花文鏡がやたら添えられていた。墓の築造時期は、倭国大乱から二〇〇年過ぎにかけてとする見方が有力だ。だとすると、墓主は天之国の権力者として大乱に関わっていたことになる。調査主だった原田大六氏は、副葬品の内容から女性の墓と睨んでいた。



馬場遺跡の方格規矩鏡